HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題 ： 北海道剣淵町の絵本の里づくりから
Author(s)	宮崎, 拓翔
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94309
Type	bachelor thesis
File Information	2024miyazaki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和 6 年度卒業論文

地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題

―北海道剣淵町の絵本の里づくりから―

北海道大学 文学部 人文科学科
人間科学コース 地域科学研究室

指導教員：宮内泰介
学籍番号：01212168
氏名：宮崎拓翔

目次

1 はじめに.....3

1-1 研究の背景と目的 3
1-2 調査の対象と方法 4

2 絵本の里づくりの活動主体と事業内容.....7

2-1 活動主体と事業内容 7
2-1-1 活動主体と主な事業内容 7
2-1-2 けんぶち絵本の里を創ろう会について 8
2-2 民間と行政の連携 10
2-2-1 絵本の館の整備とけんぶち絵本の里づくり実行委員会の結成 10
2-2-2 住民主導での活動と行政のかかわり方 11
2-3 福祉・教育施策 13

3 絵本の里づくりの広がり 15

3-1 剣淵町絵本の館の利用状況 15
3-1-1 剣淵町絵本の館の利用者数の変遷 15
3-1-2 剣淵町絵本の館の利用状況と交流人口の拡大 16
3-2 住民意識の変化 19
3-2-1 住民意識の変化と「絵本の里けんぶち」の定着 19
3-2-2 メディアによる取材と受賞歴 19
3-3 絵本の里づくりの広がり 22
3-3-1 絵本の里づくりの地域社会への広がり 22
3-3-2 絵本を通じた地域間交流 23

4 地域文化を活用したまちづくり 24

4-1 絵本文化の確立とまちづくりへの活用 24
4-2 絵本作家とのつながり 25
4-2-1 絵本作家との継続した関係性 25
4-2-2 絵本作家・堀川真さんとのつながり 27

5 地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題..... 29

5-1 地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性 29
5-1-1 地域ブランドの確立と文化資源の活用 29
5-1-2 地域文化を活用したまちづくり事業の多面的役割 29
5-2 地域文化の創出によるまちづくり事業の課題 30
5-2-1 メディアを通した情報発信の重要性 30
5-2-2 運営体制・支援者の存在と事業の継続性 31
5-2-3 若者世代の参加と将来性 32

6 結論..... 34

1　はじめに

1-1　研究の背景と目的

近年、人口減少や少子高齢化をはじめとする多様な課題の顕在化を受け、「地域活性化」や「まちづくり」への関心が高まっている。そうした中、人々の心を豊かにする「地域文化」を育み、活用したまちづくり事業が、全国各地で実施されている。北海道においても、アイヌ文化や炭鉱文化などの伝統文化を活用したまちづくり・観光施策が多く行われている。

ただし、地域の文化資源の活用にあたっては、文化資源の過剰供給や、人の集積・交流の困難さなどを原因として、活動の継続性の確保が課題となっている。白井（1989）によると、地域文化の担い手は地域内の住民であり、その成果が地域に還元される必要があるにもかかわらず、地域資源が域外者による観光レクリエーションのために利用される点や、工芸品や文化施設などを活用した地域振興が多くの地域で同時に進められることで、文化資源の過剰供給による希少性や価値の低下が起きる点が問題になるという。戸所（2004）は、芸術・文化の地域ブランド化には、差異化や一流性が重要となると述べる。また、文化・芸術は人を基本とし、人の集積・交流が重要となるため、交流しやすい基盤整備や、情報発信力・集客力の確保が求められる点も述べられている（戸所, 2004）。地域資源の活用には、ブランディング（価値の創出）による差異化と、マーケティング（価値の伝達）による誘客力の向上が重要となる（福山・敷田, 2019）。

そうした中、既存の地域資源にとらわれずに、新しく地域文化を生み出すことでまちづくりを行う地域がある。北海道剣淵町では「絵本の里」をテーマに掲げ、北海道東川町では「写真の町」として、まちづくり事業を行っている。いずれも、町の風景や豊かな自然から着想を得て地域の文化を創出した、新しいまちづくりの事例である。

北海道東川町では、写真の町事業及び各関連施策の実施により、1993 年に 6,973 人まで減少した人口が、現在およそ 8,500 人を超えるまでに回復している。「写真の町」東川町は、1985 年に、温泉街の観光振興策が、町長主導の形で町全体での活動に昇華され、世界に向けて「写真の町宣言」が出されたことにより始まった。東川町におけるまちづくり事業は、本気で地域振興や知名度向上を目指すために、「全く新しい文化、新しい価値観を町に持ち込むところまで徹底する必要がある。」というのが提案の根幹であった（中山, 2024）。

既存の文化ではなく、新しく地域文化を生み出して行われるまちづくり事業は、1980 年代から始まった一村一品運動の流れの中で、新しい価値観を取り入れることにより他地域との差異化と地域資源の希少性の確保の課題を解決しながら、地域固有の特産品や文化資源の有無にとらわれないまちづくりの可能性が広がることが期待される。

本研究では、30 年以上にわたって活動が継続している北海道剣淵町の「絵本の里づくり」を事例として、既存の地域資源にとらわれない新しいまちづくり事業が地域社会に与える

影響と、継続的な活動を行うために必要な要素を明らかにすることで、その有用性と課題について考察する。そして、地域文化の創出によるまちづくり事業の可能性を探ることを、本研究の目的とする。

1-2　調査の対象と方法

北海道旭川市から国道 40 号線を北へ約 50 キロ、北海道の中央部、上川総合振興局管内の中央よりやや北に位置する剣淵町は、人口約 2,700 人（2024 年 11 月現在）[1]の農業が基幹産業の町である。名寄盆地に属し、中央部を天塩川の支流剣淵川が流れ、その流域は農業に適した平地で、東西の両側は丘陵地帯である。人口は、生産年齢層の都市への流出により、1954 年の 9,530 人をピークに減少の一途をたどってきた（剣淵町史編さん委員会, 2020）。総就労人口の約 4 割を農業就業人数が占めており、主要な栽培作物は、米をはじめ、じゃがいも、かぼちゃ、人参、玉ねぎ、豆類など多品種の栽培が行われている[2]。

図 1　北海道剣淵町

剣淵町は、「絵本の里」をテーマに掲げながらまちづくりを行っている。1988 年、町の活性化を模索する町民有志からなる「けんぶち絵本の里を創ろう会」の活動により、剣淵町の「絵本の里づくり」は始まった。その後、1991 年に剣淵町絵本の館が開館し、絵本原画展の開催や「けんぶち絵本の里大賞」の創設など、30 年以上にわたって、町をあげての精力的な活動が行われてきた。

[1] 絵本の里けんぶち町ホームページより
[2] 剣淵町観光協会ホームページより

本研究では、書籍・雑誌論文・新聞記事・インターネット記事による文献調査に加えて、剣淵町絵本の館の関係者・けんぶち絵本の里を創ろう会の会員・利用者・絵本作家の方々を対象とした聞き取り調査や、剣淵町絵本の館で開催される各種イベントでの参与観察を行った。現地調査は、2023 年 6 月 10 日・9 月 30 日、2024 年 8 月 22 日・9 月 21 日の 4 回行った。聞き取り調査の対象者は、以下の表の通りである。

表 1　聞き取り調査の対象者と調査日

聞き取り調査の対象者	出身・居住地	備考	調査日
けんぶち絵本の里を創ろう会会長Aさん	剣淵町出身 剣淵町在住	62歳（調査当時） 農家 けんぶち絵本の里を創ろう会設立当初からの会員	2023年6月10日
絵本の館司書Bさん	釧路市出身 剣淵町在住	2018年度から剣淵町絵本の館に勤務	2023年6月10日 2024年8月22日
絵本の館の利用者Cさん	剣淵町出身 剣淵町在住		2023年6月10日
絵本の館職員Dさん			2023年9月30日
絵本の館職員Eさん	奈良県出身 剣淵町在住	地域おこし協力隊として剣淵町に移住 2023年度から剣淵町絵本の館に勤務	2024年8月22日
絵本の館職員Fさん	士別市出身 士別市在住	2020年度から剣淵町絵本の館に勤務	
けんぶち絵本の里を創ろう会会員Gさん	剣淵町出身 剣淵町在住	69歳（調査当時） 元剣淵副町長	
けんぶち絵本の里を創ろう会会員Hさん	剣淵町出身 剣淵町在住		
絵本作家・堀川真さん	紋別市出身 名寄市在住	剣淵町絵本の館にて工作ワークショップ「真ちゃんの創作教室」を開催	2024年9月21日

本稿は、全 6 章で構成される。はじめに、2 章で剣淵町における絵本の里づくり事業の活動主体と事業内容について整理する。続いて 3 章では、絵本によるまちづくりが町へ定着するまでの過程や、絵本の里づくり事業が地域社会へ与えてきた影響について記述し、剣淵町での絵本の里づくりの広がりについて議論する。4 章では、剣淵町における絵本文化を活かした事業や、剣淵町と絵本作家らとの交流について紹介し、地域文化を活用したまちづくり事業の特性について考察する。そして 5 章で、4 章までの内容をふまえ、地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題について考察していく。最後の 6 章では、本研究の目的や、本稿で展開してきた議論を振り返り、本研究の課題点を述べることで、本論文の締めとしたい。

2　絵本の里づくりの活動主体と事業内容

2-1　活動主体と事業内容

2-1-1　活動主体と主な事業内容

剣淵町の「絵本の里づくり」は、1988 年に、町の活性化を模索する商工会青年部を中心とした町民有志により結成された、「けんぶち絵本の里を創ろう会」の活動から始まった。絵本の里づくり活動は、士別市在住の銅版画家である小池暢子氏や、元福武書店児童図書編集長の松居友氏らの助言をきっかけに、剣淵町に絵本原画美術館を建てることを目標として始まった。この活動は、行政主導ではなく、住民団体であるけんぶち絵本の里を創ろう会により行われてきたが、講演会や懇談会を通して町民へ参加や援助を呼びかけ、最初の企画として剣淵町で世界中の作家による絵本原画を集めた絵本原画展の開催を成功させたことで、住民活動による新しいまちづくりが徐々に町全体に広がっていった。こうしたけんぶち絵本の里を創ろう会の精力的な活動に応えるかたちで、剣淵町は、「ふるさと創生資金（1 億円）」の半分を絵本の里づくり事業に活用することを決定し、1991 年 8 月 1 日には、公民館（旧役場庁舎）を改修して「絵本の館（旧館）」が開館した（剣淵町史編さん委員会, 1999）。その後、2004 年に絵本の館新館が開館し、2018 年 6 月 8 日にはけんぶち絵本の里を創ろう会が設立 30 周年の節目を迎えたが、剣淵町の絵本の里づくりは、けんぶち絵本の里を創ろう会の設立から 35 年以上経った現在まで続いている（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

剣淵町の 2 大メイン事業として、「けんぶち絵本の里大賞」「けんぶち絵本まつり」がある。

けんぶち絵本の里大賞は、前年度 1 年間に日本国内で出版された絵本を集め、毎年 8 月 1 日から 9 月 31 日までの 2 か月間に、来館者の投票により大賞を決定する絵本賞である（剣淵町史編さん委員会, 2020）。1 番得票の多かった作品に授与される「けんぶち絵本の里大賞」のほかに、次に得票の多かった 2 作品に「びばからす賞」が授与される。さらに 2011 年度からは、新人賞にあたる「アルパカ賞」が創設された。絵本の館の開館と同時に開催された、1991 年の第 1 回の絵本の里大賞では、142 作品の応募があったが、2004 年度頃から、毎年 300 作品前後の応募が集まるようになっている[1]。

毎年 2 月中旬から 3 月下旬にかけては、けんぶち絵本まつりが開催され、けんぶち絵本の里大賞各受賞作品の絵本原画展・けんぶち絵本の里大賞授賞式及び歓迎レセプション・受賞作家によるおはなし会などの催しが行われている。受賞作家による絵本の読み聞かせや、サイン会なども開かれ、著名な絵本作家との交流を楽しむことができる貴重な機会となっている（剣淵町教育委員会, 2024）。

[1] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

2-1-2　けんぶち絵本の里を創ろう会について

1988 年 6 月 8 日に、町内有志 14 人で結成されたけんぶち絵本の里を創ろう会は、主に地域住民によって構成されており、その会員数は 2024 年現在 81 名である（表 2）。20 代から 70 代まで幅広い年代の人々が所属している。多くの会員は、農家や僧侶、役場や絵本の館の職員、主婦など別の職業に就いており、その傍らで活動している。現在の会長は、第 7 代目として 2017 年度に就任し[1]、普段は町の主要産業である農業に従事している[2]。ピーク時には、会員数が 300 人を超えていた時期もあったというが、近年の会員数の減少をみると、かつての勢いが弱まってきている現状もある。さらに、会員の年齢層も上がってきており、けんぶち絵本の里を創ろう会の高齢化が進んでいる[3]。

表 2　けんぶち絵本の里を創ろう会（2024 年度）

設立	1988年6月8日
会員数	81人
予算	3,075千円（うち町補助金 1,275千円）
事業	絵本原画展・企画展、工作等教室、巡回文庫、出版社・作家との交流など

（出典）剣淵町教育委員会（2024）より作成

けんぶち絵本の里を創ろう会の絵本の里づくりは、剣淵町を有名にして、後世に「剣淵町」の名前を残したい、そして、子どもたちが誇りを持てるような町にしたいとの想いから始まった。当時、絵本の里づくりのきっかけとなった人物である商工会青年部長が、剣淵駅で町の若者が「こんな寂れた町にいても仕方ない」と話しているのを聞いた。また、すすきので商工会青年部の仲間と飲んでいるとき、どこから来たのか聞かれたため「剣淵から来た」と答えると、「お酒の『剣菱』なら知ってるけど剣淵ってどこ？」と間違えられ腹が立ったこともあった。そういったことが活動の火種となったと、けんぶち絵本の里を創ろう会現会長の A さんは話す。それから、絵本を活用したまちづくりで「剣淵」の名を有名にすることによって、交流人口や移住者を増やして町を活気付けることを目標として活動してきたという[4]。

けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんによると、絵本の里づくりの生みの親は、商工

[1] 第 4 代以来の再任であった
[2] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さん及び 2024 年 8 月 22 日、絵本の館職員 E さんへの聞き取りより
[4] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより

会青年部長をしていた 1 人の町の電気屋だったという。彼は、初めに当時の剣淵町長に話を持ちかけたところ、他に仲間を連れて来たら考えてもいいという提案を受けた。それから、まちづくりをやらないかと町民に声をかけ、現会長 A さんも含めて多くの人々を巻き込んでいき、中心となって活動を進めていった。当初は、まちづくりという目的はあるものの、お酒を飲むことを目的として集まっていた人も多かったという。以下は、絵本の里を創ろう会現会長 A さんの語りの一部である。

> （私は、）最初に声かけられた 1 人だった。まあ、酒 1 杯飲ませてやるから来いやって話だった。（活動の）拠点[1]ができる前は飲食店だった。頻繁に集まってお酒を飲んだり騒いだりしてた。当時は創ろう会のメンバーで夜中中話したり、そういうのがすごく楽しかった。わいわいと焼肉やったり、楽しかった。まちづくりがしたい人もいれば、酒飲み好きな人もいれば、絵本が好きだとか、いろんな方がいた。
>
> （絵本の里づくりの生みの親となった人物について、）商売してたから、この人なら賛同してくれるとか、こいつなら酒飲ましてやるっつったらついてくるとか、だいたい分かってたんじゃないかな彼。[2]

けんぶち絵本の里を創ろう会は、「絵本でまちづくりをする」という明確な目的を持って集まったコミュニティでありながら、その参加のきっかけは人によって様々であった。また、キーパーソンとなる絵本の里づくりの生みの親となった人物が、人々を集めながらまちづくり活動へ舵を切って行ったことについては、今でも町で語り継がれ、高く評価されているという[3]。住民が主体となって進められた活動の裏には、活動を引っ張っていく中心人物の存在や、けんぶち絵本の里を創ろう会のアットホームな雰囲気などがあった。

けんぶち絵本の里を創ろう会は、2018 年 6 月 8 日に設立 30 周年を迎え、同年に祝賀会や記念セレモニーなどが開催された。記念セレモニーでけんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、「剣淵を何とか有名にしたいと藁にもすがる思いからつかんだ絵本。まさに絵本など全く似合わないおやじたち 14 人でのスタートであったが、30 年前は想像しなかった絵本の里けんぶちが認知され、映画にもなった[4]。みんな年をとったが、あの頃の熱意を忘れず、出会いと絆を大切に今後も邁進していきたい」と式辞を述べた（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

---

[1] のちに絵本の館として開館する公民館（旧役場庁舎）
[2] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[4] 「絵本の里けんぶち」を題材にした映画「じんじん」

2-2　民間と行政の連携

2-2-1　絵本の館の整備とけんぶち絵本の里づくり実行委員会の結成

絵本の里づくりは、当初から行政主導ではなく、住民団体であるけんぶち絵本の里を創ろう会の主導により行われてきた。しかし、剣淵町は、1989 年度に「ふるさと創生資金（1 億円）」の半分を絵本の里づくり事業に活用することを決定し、絵本や絵本原画及び備品の購入を行い、けんぶち絵本の里を創ろう会の活動に対しては町助成金が交付されるようになった。その後、絵本原画収蔵館の建設や公民館（旧役場庁舎）の改修など、ハード面の整備が進められ、1991 年 8 月 1 日に「絵本の館（旧館）」が開館した（剣淵町史編さん委員会, 1999）。

当初は、住民団体であるけんぶち絵本の里を創ろう会のみで活動してきたが、会員は活動とは別に本業を持っていたため、行政が絵本の里づくりの拠点として絵本の館を整備して職員を配置し、絵本の館が活動の事務局を担うようになった[1]。2024 年現在、絵本の館の職員体制は、副館長 1 人（正職員）、司書 1 人（正職員）、地域おこし協力隊（絵本クリエイター）1 人、その他臨時職員 5 人の計 8 人体制である。絵本の館の職員は、絵本の館の管理・運営、絵本などの貸出、絵本原画の収蔵や展示、各種普及教室の指導などの業務にあたっており、けんぶち絵本の里を創ろう会などの団体ボランティアとの両輪によって、絵本の里づくり事業を推進している（剣淵町教育委員会, 2024）。

また、中心事業である「けんぶち絵本の里大賞」「けんぶち絵本まつり」を実施運営するために、1997 年 5 月に、けんぶち絵本の里づくり実行委員会が結成された。これら 2 大事業は 1996 年度まで絵本の里を創ろう会のみで開催していたが、町全体で協力して実施していきたいとの思いから、町長が実行委員長となり、1997 年度第 7 回の絵本の里大賞からけんぶち絵本の里づくり実行委員会によって開催されている（剣淵町史編さん委員会, 2020）。けんぶち絵本の里づくり実行委員会には、けんぶち絵本の里を創ろう会のほかに、もとより積極的な協力関係にあった、更生施設「西原学園」や、住民活動団体「剣淵・マツダとふれあう会」「剣淵・生命を育てる大地の会」なども参加して組織され、2024 年現在、町・町議会・商工会・各学校・社会福祉施設など町内 27 団体で構成されている（表 3）。

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより

表 3　けんぶち絵本の里づくり実行委員会（2024 年度）

組織	1997年度より
団体数	町内27団体（町、町議会、商工会、各学校、社会福祉施設などの機関・団体で構成）
予算	4,760千円（うち町補助金 3,349千円）
事業	けんぶち絵本の里大賞、絵本原画展、絵本まつり、絵本の里大賞授賞式

（出典）剣淵町教育委員会（2024）より作成

2-2-2　住民主導での活動と行政のかかわり方

絵本の里づくりは、当初は住民団体であるけんぶち絵本の里を創ろう会の主導による活動であった。1989 年度に「ふるさと創生資金（1 億円）」の半分を絵本の里づくりに使うことが決まり、行政が絵本の里づくりにかかわるようになるが、「活動の主体は住民によるもの」との考えから、あくまで「官民連携」という形でのかかわりとなった。けんぶち絵本の里を創ろう会設立当時の剣淵町長は、活動が始まった頃の状況を以下のように語っている。

> 突然、私の所に農業や商業、勤労青年がきて、“絵本によるまちづくりをやってはどうか”“絵本によるまちおこしをやりたいので協力してほしい”との申し入れがありました。正直言って返答に苦慮しましたが、有為で誠実な青年の申し入れであり、協力を約束しました。ただし、行政が主体となって進めることはしない。行政が主導すると民力が死滅し活力を失うと考えたこと、また、絵本は出版社や絵本画家・作家と密接な関係が必要であり、さらに絵本に対し人それぞれ好みや思いを異にするため、民主導であればそれらの対応が自由にできるからです。（剣淵町史編さん委員会（1999:302）より）

行政が主にハード事業の面で絵本の里づくりにかかわるようになったが、あくまで「官民連携」という形をとり、引き続き事業の運営主体はけんぶち絵本の里を創ろう会・けんぶち絵本の里づくり実行委員会が担ってきた。

実際に、けんぶち絵本の里大賞開催期間中は、けんぶち絵本の里を創ろう会・けんぶち絵本の里づくり実行委員会のメンバーによるボランティアによって会場設営・運営が行われている[1]。けんぶち絵本の里大賞開催期間以外にも、けんぶち絵本の里を創ろう会主催の各

[1] 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんへの聞き取りより

種イベントや、けんぶち絵本の里を創ろう会会員による絵本の読み聞かせなどが行われており、けんぶち絵本の里を創ろう会と絵本の館の両輪での活動によりイベントや催しが運営されている[1]。2004 年の絵本の館新築移転の際には、同 4 月 10 日に、旧絵本の館と福祉センターの公民館図書室から絵本や図書など、すべてを新しい絵本の館に運び込む作業を行ったが、この作業も町民約 90 人からなるボランティアの手で行われた（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

また、絵本の館職員や役場職員の多くが、けんぶち絵本の里を創ろう会の会員でもあるという点も特徴的であり、連携時のコミュニケーションについて、民間と行政の異なるセクター間において各主体が顔の見える関係性であるといえる。けんぶち絵本の里を創ろう会と絵本の館・剣淵町の連携について、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんと絵本の館司書 B さんは、次のように語っている。

> （けんぶち絵本の里大賞の企画・運営に関して）細かい絵本の里大賞の中身、というか、毎回同じことやってる訳じゃないんだ。その（けんぶち絵本の里大賞の）基礎的な部分は計画・立案はこちらで立てて、町長に伺い立てて、今回からはこの作戦で行きましょうっていうのは、（けんぶち絵本の里を創ろう会から）提案してきましたね。[2]

> 行政（絵本の館）主導（で行うイベント）でいいますと、8 月 7 日の七夕に夜の 9 時まで（絵本の館を）開けて[3]夜のお話会をやったりするのですが、そのときに（けんぶち絵本の里を）創ろう会の会員さんに読み聞かせしてくれませんかってお願いしたり、屋上デッキで（けんぶち絵本の里を創ろう会）初代会長さんが星に詳しい方で星空観察会を開いたりとか。（絵本の）館でも創ろう会の会員さんのノウハウとかスキルとかを頼りにさせてもらってご協力いただくこともあります。お正月とかも、（絵本の）館としては明確に閉館日決まっているけど、年末年始町外から帰省する方も多く、ずっと閉めてるのもったいないから、1 月 3 日絵本の館開けようっていうときにも、創ろう会の人に読み聞かせの協力お願いして一緒にやったりしております。[4]

このように、けんぶち絵本の里を創ろう会と絵本の館・剣淵町が、互いに顔の見える関係性を築けており、近い関係性で協力しあうことが可能であったことが、剣淵町の絵本の里づくりにおける官民連携の特徴である。

---

[1] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[3] 通常の開館時間は 10:00〜17:00
[4] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

図 2　民間と行政の連携のしくみ

（出典）剣淵町教育委員会（2024）より（一部修正）

2-3　福祉・教育施策

さらに、剣淵町は、絵本の館を通じての福祉・教育施策に力を入れており、保育所や各学校、診療所、道の駅などへの絵本巡回文庫[1]・学校図書室支援事業のほか、子育て支援事業・子どもの居場所づくり事業に取り組んでいる[2]。

子育て支援事業としては、毎週火曜日の午前に、絵本の館で「ちびっこあそびタイム」を開催し、0〜6 歳児親子を対象に、子育て相談・読み聞かせ・親子遊びなどを実施し、子育ての不安解消や、保護者同士の交流を促している。子どもの居場所づくり事業としては、小学生を対象に、毎週火曜日の放課後に工作・屋外あそびなどを行う「ヤカタクラブ」や、絵本作家・堀川真氏による工作教室「真ちゃんの創作教室」を毎月第 3 土曜日に開催している（表 4）。

絵本の館の「えほんのへや」（絵本閲覧室）には、広い空間にテーマ別に分かれた国内外の絵本、しかけ絵本、布絵本、大型絵本のほか紙芝居があり、書架の配置は子どもや車いす利用者に配慮した高さで並んでいる。一般書閲覧室には一般書と児童書、雑誌なども揃っており、調べ物や勉強などで読書室も自由に利用することができる。また、絵本の館には、木のボールプール「木の玉プール」やままごと遊びができる「ごっこハウス」が設置してあり、子どもに人気の遊び場となっている。絵本の館司書 B さんは、「絵本の館は、えほんのへやの中心に子どもの遊び場があるのが特徴。図書館でありながら静かな空間ではなく、子どもたちの遊ぶ声や笑い声が飛び交うにぎやかな図書館」であると語る[3]。こうした絵本の館は、人にやさしい施設を目指した考え方に基づく建物が評価され、2010 年に一般社団法人公共建築協会の「公共建築賞・優秀賞」を受賞した（剣淵町史編さん委員会, 2020）。絵本の館自

[1] 各学校、保育所、診療所、道の駅などに 絵本を届け、絵本に触れてもらう活動
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

体が、住民・子どもたちの憩いの場・交流の場として機能している。

表 4　絵本の館の子育て支援・子どもの居場所づくり事業

子育て支援事業	ちびっこあそびタイム	毎週火曜日午前、0〜6歳児親子対象 子育て相談、読み聞かせ、親子遊びなど
子どもの居場所づくり事業	ヤカタクラブ	毎週火曜日午後、小学生対象（公民館事業） 創作工作づくり、屋外あそびなど
	おはなしタイム	毎月第1・2土曜日午前、来館者対象（絵本の館事業）
	真ちゃんの創作教室	毎月第3土曜日、来館者対象（けんぶち絵本の里を創ろう会主催） 指導：絵本作家・堀川真氏
	特別教室	毎月第4土曜日及び随時、来館者対象

（出典）剣淵町教育委員会（2024）より作成

絵本の館で開催される定期イベントのほかに、2007 年度から、町内で誕生した子どもに、出産記念品（子どもの名前・生年月日などが刻印された木の椅子、絵本、誕生カード）を贈呈している（君の椅子贈呈事業）。2011 年度からは、ブックスタート事業が始まり、赤ちゃんにあった絵本紹介リスト・絵本の館利用者カード・子育てハンドブックなどが贈られ、子どもが絵本とふれあうきっかけをつくる活動が行われている。また、子ども絵本プレゼント事業も行っており、誕生から小学校入学前までの乳幼児に毎年 1 冊の絵本をプレゼントしている（剣淵町教育委員会, 2024）。以上のように、剣淵町では、人々の豊かな心を育む「絵本」を活用しながら、町内の子どもの成長を見守り、保護者の子育てを支援する様々な事業を実施している。

3　絵本の里づくりの広がり

3-1　剣淵町絵本の館の利用状況

3-1-1　剣淵町絵本の館の利用者数の変遷

剣淵町絵本の館は、1991 年の旧館開館から、徐々に利用者を増やしてきた。旧館開館から 3 年間は年間の来館者数が増加し続けたものの、その後一度利用者が減少した。しかし、2004 年の絵本の館新館が開館して以降は、年間の来館者数が大幅に増加し、2016 年度まで毎年 3 万人を超える来館者数を記録してきた（図 3)。絵本の館新館が開館した 2004 年度には年間の来館者数が 39,668 人を記録し、2007 年度には年間の来館者数が 41,704 人となり、最多の年間来館者数を記録した。2023 年度には、1991 年の旧館開館以降の累計来館者数が 90 万人を突破した。

1 日の利用者では、イベントが開催されるゴールデンウィーク期間や、けんぶち絵本の里大賞開催期間中に来館者数が多くなる。毎年、ゴールデンウィーク期間や、けんぶち絵本の里大賞開催期間中の土・日・祝日は 1 日の来館者数が 200 人を超える（2024 年 5 月 3 日～6 日の 4 日間は 300 人を超えた）という[1]。

けんぶち絵本の里大賞には毎年約 300 作品の絵本が集まっており、2024 年度は 263 作品の応募があった。けんぶち絵本の里大賞は、応募条件を前年度 1 年間（前年度 4 月 1 日から 3 月 31 日まで）に日本国内で出版された絵本としている。そのため、その年の社会情勢などにより絵本の出版点数が左右され、応募作品数も年によって変動するが、2002 年ごろから応募作品数が増加し、以降毎年 300 作品前後の絵本が集まるようになった。

2004 年度から 2016 年度までは毎年 3 万人を超える来館者数を記録してきたが、2015 年度からは、年間の来館者数が減少傾向に転じている（図 3)。2020 年度・2021 年度は、2020 年の 4 月・5 月、2021 年の 5 月・6 月・9 月に新型コロナウイルス感染症の流行による臨時休館があり、利用者が大きく減少している[2]。その後、2022 年度、2023 年度と 2 年連続で年間の来館者数が回復しているが、新型コロナウイルス感染症の流行前の水準までは増加しておらず、今後の利用者数の動向が注目される。

[1] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

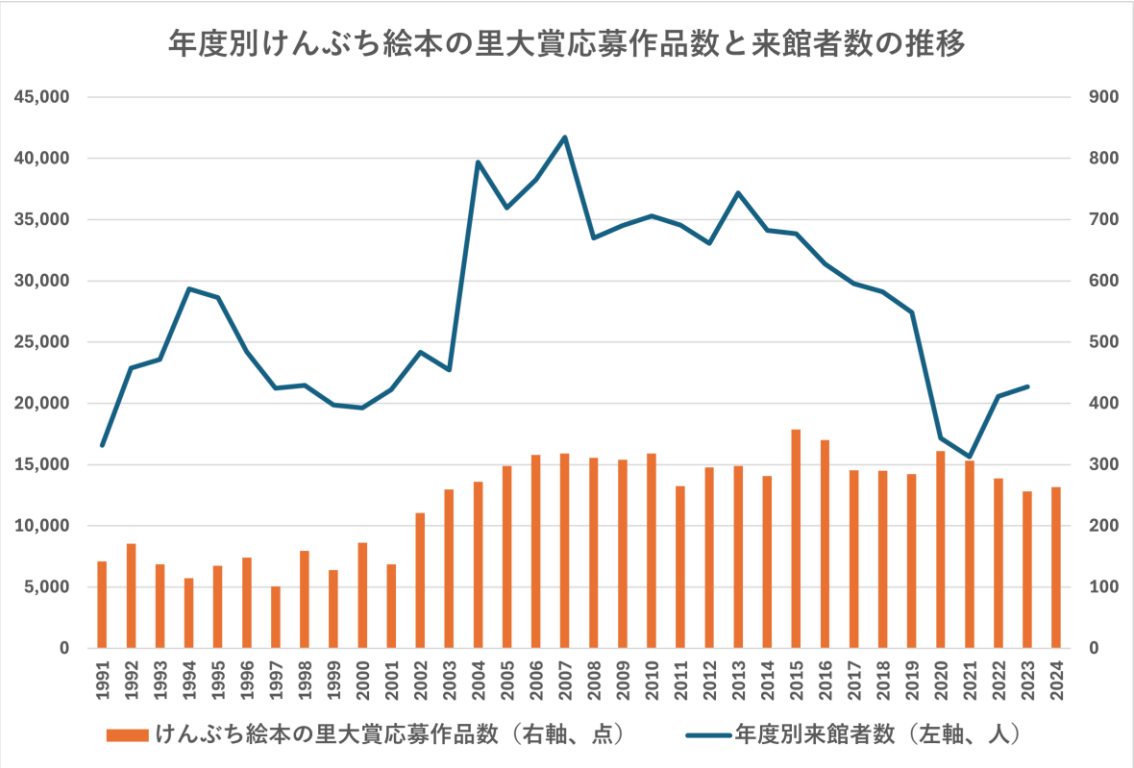

図 3　年度別けんぶち絵本の里大賞応募作品数と絵本の館年間来館者数の推移

（出典）「絵本の館年度別来館者数」及び「けんぶち絵本の里大賞年度別来館者・総投票数一覧」より作成

3-1-2　剣淵町絵本の館の利用状況と交流人口の拡大

絵本の館は、地域の図書館として、一般書・児童書と絵本などを蔵書（計 76,622 冊、うち絵本は約 45,000 冊）しており、町内外の個人・団体向けに貸出を実施している（剣淵町教育委員会, 2024）。絵本の館司書 B さんによると、町外の利用者への貸出は、町内の「けんぶち絵本の里家族旅行村」キャンプ場や剣淵温泉レークサイド桜岡に宿泊する家族連れなどが、剣淵町滞在中に利用することがあるという[1]。

絵本の館で定期開催される各種イベントには、年 34 回開催された子育て支援事業「ちびっこあそびタイム」に計 207 人、年 33 回開催された放課後の公民館事業「ヤカタクラブ」に合計 543 人、年 20 回開催されたおはなし会「おはなしタイム」に合計 351 人、年 12 回開催された創作教室「真ちゃんの創作教室」に合計 209 人、が参加した（2023 年度、表 5）。

[1] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

表 5　絵本の館の利用状況（2023 年度）

項　　目	利　　用　　実　　績		
利用者数	大人13,686人	子ども7,653人	計21,339人
図書蔵書冊数	76,622冊		
図書貸出	貸出個人	2,280人	12,965冊
	貸出団体	355件	6,596冊
ちびっこあそびタイム	毎週火曜日午前	34回　延べ207人	（0～6歳児親子対象）
ヤカタクラブ	毎週火曜日午後	33回　延べ543人	（小学生対象）
おはなしタイム	第1・2土曜日午前	20回　延べ351人	（来館者対象）
真ちゃんの創作教室	第3土曜日	12回　延べ209人	（来館者対象）
特別教室	第4土曜日及び随時	23回　延べ514人	（来館者対象）

（出典）剣淵町教育委員会（2024）及び「剣淵町絵本の館 蔵書冊数、貸出冊数一覧」より作成

そして、剣淵町絵本の館の利用者は、剣淵町内だけでなく、町外からの利用者も多いことが特徴であるといえる。けんぶち絵本の里大賞の居住地別投票数を見ると、8 割以上が町外在住者による票数であることがわかる（図 4）。2022 年度は、総投票数 2,062 票のうち、町内在住者の 341 票に対して、町外在住者による票数は 1,721 票となっている。剣淵町から近い旭川市からだけでなく札幌市からの来館者も多く、札幌市在住者の投票数が旭川市在住者の投票数を上回っている。また、総投票数のうち約 13 パーセントを占める 271 票が北海道外在住者による投票数であり、東京・大阪・九州など道外の遠方からの来訪者も多いという[1]。

けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、「剣淵」の名を有名にすることによって、交流人口や移住者を増やして町を活気付けることを、絵本の里づくりの目標として掲げ活動してきたと話した[2]。毎年遠方から多くの利用者が絵本の館を訪れていることから、絵本の館や、けんぶち絵本の里大賞など絵本の里づくり関連事業が、観光資源として剣淵町における交流人口の増加に寄与しているといえる。

[1] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより

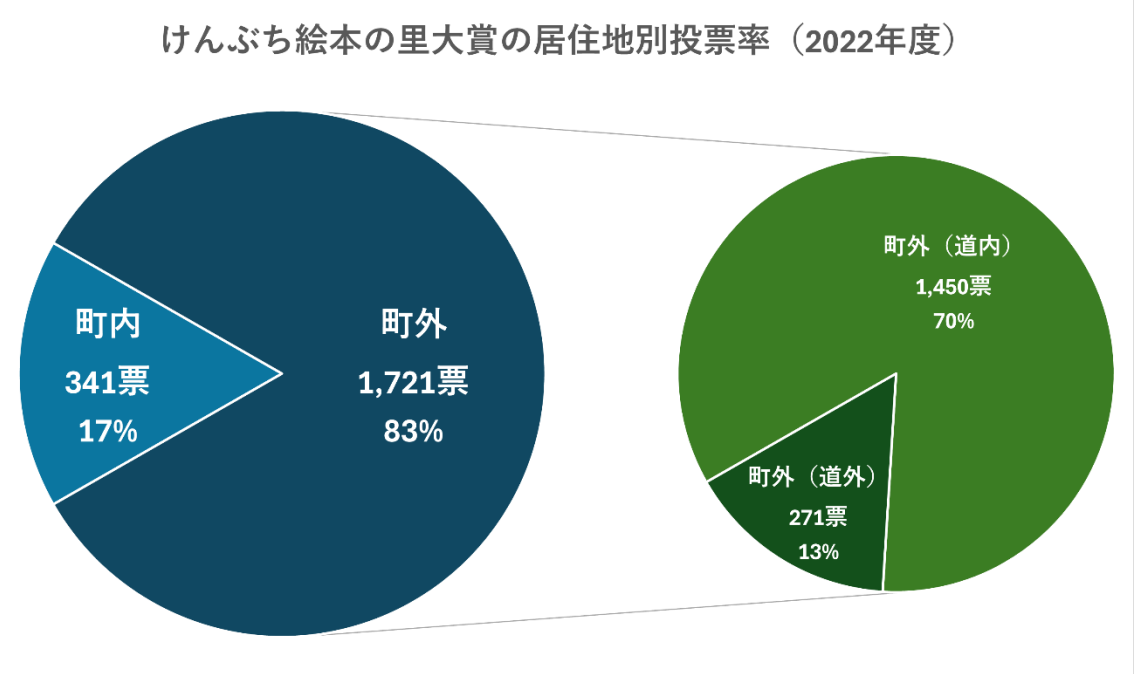

図 4　けんぶち絵本の里大賞の居住地別投票率（2022 年度）

（出典）2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより作成

さらに、絵本の館の利用者だけでなく、職員の中にも、町外から絵本の館に通勤している職員や、町外から剣淵町に移住し就職した職員がいる。絵本の館職員 F さんは、剣淵町に隣接する士別市の在住であり、士別市から絵本の館に通勤している[1]。絵本の館職員 E さんは、奈良県出身で、地域おこし協力隊として剣淵町に移住したが、移住後、けんぶち絵本の里を創ろう会に加入し、それから絵本の館で勤務することになったという[2]。また、絵本の館司書 B さんも、北海道釧路市の出身であり、絵本の館に就職する際に剣淵町に移住した。絵本の館司書 B さんは、「釧路で育ったけど、読書が好きで、元々絵本の里けんぶちという言葉は知っていて、絵本の里の図書館司書になりたいという夢を持っていました。茨城の大学で司書の資格を取ったが図書館司書の募集がなくって、隣町の幌加内町で就職し、その後釧路で働いていましたが、あるとき、声をかけられて剣淵に就職し、剣淵に腰を据えることになりました。夢が叶ったんですよ」と話した[3]。

絵本の館職員らのように、「絵本の里けんぶち」に興味を持ち、剣淵町に住みたい、勤務したいと手を挙げる人がいることから、交流人口や移住者の増加につながっていることがわかる。

[1] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館職員 F さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館職員 E さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

3-2　住民意識の変化

3-2-1　住民意識の変化と「絵本の里けんぶち」の定着

剣淵町で「絵本の里づくり」が始まった当初は、「剣淵は農業の町なのに、絵本で飯が食えるのか」という疑問の声も見られた[1]。けんぶち絵本の里を創ろう会のメンバーの中には、あまり乗り気ではなく、付き合いで仕方なく会員になった人もおり、「外に向けての PR にばかり目が向いて、町民や町の子どもがないがしろにされている」という批判もあった[2]。

そいった背景もあり、しばらくの間、町民からは絵本の里づくりにあまり関心が向けられなかった。しかし、テレビや新聞などのメディアに取り上げられたり、地域づくり賞などが授与されたりしたことで、町外の人々から認知されはじめる。その結果、徐々に町民の理解を得られるようになり、それまでは男性ばかりであったけんぶち絵本の里を創ろう会に主婦や若い女性が加わるようになるなど、町全体での絵本の里づくりへの気運が高まっていった[3]。

けんぶち絵本の里を創ろう会会員の G さんは、「絵本の里けんぶち」が浸透するまでの剣淵町の様子を次のように語っている。

> まず町民から認知されるまで 10 年かかったね。(町の) 外からはメディアで認知されても、中はなかなか時間かかった。(町の外の人から)「剣淵有名になったね」って言われて、 30 年経ってみんなが「うちは絵本の里だから」って、町を誇れるようになった。[4]

絵本の里づくりが町の外から評価されるにつれて、「絵本の里けんぶち」が町の誇りとなり、絵本文化が町の文化として定着したのである。

3-2-2　メディアによる取材と受賞歴

絵本の里づくりの広がりにおいて、剣淵町の「絵本」を活用した新しいまちづくり事業がテレビや新聞などのメディアに取り上げられたことは、町外での知名度向上による交流人口の増加に加えて、町民からの「絵本の里けんぶち」の価値の再認識にもつながった。テレビでは、NHK や民放テレビ局からの取材があり、芸能人がリポーターとして町を訪れたこともあった。1991 年の絵本の館開館の際には、北海道新聞全道版に当時の初代絵本の里を

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 H さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取り及び 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんへの聞き取りより
[4] 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんへの聞き取りより

創ろう会会長へのインタビュー記事が掲載され、剣淵町の住民活動によるユニークな「絵本のまちづくり」が紹介された[1]。また、絵本の館司書 B さんは、「雑誌で、全国の素敵な絵本がある場所のような感じで紹介されたり、図書館施設でありながら観光施設のような側面もあるので、ガイドブックに載ったりすることもありますね[2]」と話す。絵本の里づくりの広がりにおいて、メディアによる影響は無視ができない要素のひとつであるといえる。

また、剣淵町独自のまちづくり活動が評価され、国や道などから多数の表彰を受けてきた。1991 年 3 月に、剣淵町の「絵本の里づくり」が北海道教育委員会より「生涯学習のまちづくり百選」に認定され、その後も、絵本の里を創ろう会の活動は各界から高く評価され、数多くの表彰を受けている。2015 年度には、剣淵町が文化庁長官より「平成 27 年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」を受けた。これは、農業・福祉の連携による絵本の里づくり、活動の拠点となる絵本の館の機能、来館者が投票する絵本の里大賞など、地域の特色を生かした文化芸術活動による地域活性化の取り組みの成果が高く評価されたものである（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

その他にも、俳優・大地康雄氏の企画によって、絵本の館での絵本の読み聞かせの様子をもとにして生まれた映画「じんじん」は、剣淵町内で多くのシーンが撮影され、完成後は映画と共に「絵本の里けんぶち」が全国に発信された。この映画製作のロケに際しては、町民によるエキストラ出演や炊き出しの食材提供とボランティアなどが行われた[3]。

[1] 北海道新聞（1991.08.03 夕刊）より
[2] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[3] 絵本の里けんぶち町ホームページより

表 6　剣淵町の絵本の里づくりの歩みと受賞歴

	主な出来事と受賞歴
1988年	けんぶち絵本の里を創ろう会設立
1989年	第1回けんぶち絵本原画展「けんぶち国際絵本原画展」開催
1991年	北海道教育委員会「生涯学習のまちづくり百選」受賞 絵本の館オープン 第1回けんぶち絵本の里大賞
1992年	「ふるさとづくり大賞」内閣総理大臣賞受賞
1993年	「地域づくり優良事例北海道知事賞」受賞
1994年	「北海道ニューフロンティア大賞」受賞
1996年	「地域づくり自治大臣表彰」受賞
1997年	けんぶち絵本の里づくり実行委員会組織
2001年	けんぶちふるさと絵本『ムーニャーとほしのたね』(さとうまさと作)発刊
2002年	読売新聞社「北のくらし大賞」審査員特別賞受賞 北海道教育委員会上川教育局「教育実践表彰」
2004年	絵本の館新館オープン
2007年	北海道新聞社「北のみらい賞」受賞
2010年	剣淵町絵本の館が一般社団法人公共建築協会「第12回公共建築賞」優秀賞受賞
2012年	映画『じんじん』ロケ開始
2013年	映画『じんじん』公開 「読売新聞社賞」受賞
2015年	文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)
2018年	けんぶち絵本の里創ろう会30周年
2020年	第30回けんぶち絵本の里大賞

（出典）剣淵町絵本の館ホームページ「「けんぶち絵本の里を創ろう会」と絵本の里づくりのあゆみ」より作成

3-3　絵本の里づくりの広がり

3-3-1　絵本の里づくりの地域社会への広がり

地域住民の支持を受けて進められた絵本の里づくりは、交流人口の拡大だけでなく、地域社会に様々な影響を与え、多様な絵本の里のコミュニティの広がりを見せた。

絵本の里づくりが進められたことで、絵本の館が住民や子どもたちの憩いの場となり、けんぶち絵本の里を創ろう会も、住民同士の交流の場となっていった。けんぶち絵本の里を創ろう会では、活動開始初期から、会議・集会や宴会を通じて交流が盛んに行われてきた。毎年、けんぶち絵本の里大賞の投票期間終了の翌日 9 月 1 日には、投票箱の開票・集計作業が行われる。開票作業は、けんぶち絵本の里大賞実行委員会の構成団体の中から約 40〜50 人が絵本の館のホールに集まって町民総出で行われ、当日中に集計結果が出る[1]。絵本の館職員は、開票作業はけんぶち絵本の里を創ろう会会員、絵本の館職員、住民、役場職員など、多くの人々が集まる町の一大イベントであると話す[2]。絵本の里づくりの広がりにより、絵本の館で開催される各種催し事やけんぶち絵本の里を創ろう会での集まりなど、町内で様々なイベントが開かれるようになり、住民が集まる機会が増えた。

そして、絵本の里づくりは、町内の福祉事業への広がりも見られた。剣淵町西原地区では、社会福祉法人「剣淵北斗会」により、1980 年に知的障害者の更正施設「剣淵西原学園」が、続いて 1993 年に授産施設「剣淵北の杜舎」が開設され（両施設一帯を「西原の里」と呼ぶ）、福祉のまちづくりの形が整えられてきた。その後、「西原の里」が剣淵の絵本の里づくり活動の重要な推進役となり、「西原の里」の福祉ネットワークを通じて、福祉とのつながりを持つ全国の絵本作家を招いて「絵本の里福祉フォーラム」が開催された（剣淵町教育委員会, 2024）。絵本の里づくりの背景には、「西原の里」の地域づくりへの参加協力があったのである。また、様々な福祉連携事業が取り組まれ、地場産品を使った軽食や飲み物が楽しめる絵本の館内の「喫茶・らくがき」は、障害者の自立と社会参加の場として活用されている（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

農業の分野では、絵本の里らしい自然や人に優しい農業を実践し、安全な農産物を消費者に届けようと 1990 年 2 月に剣淵町で結成された、無農薬・低農薬（有機栽培）の生産者団体「剣淵・生命を育てる大地の会」が、全国の農業者、消費者との交流を進めている。絵本作家のデザインによるポスターやパッケージを作成し、付加価値の高いじゃがいも、かぼちゃなどを全国各地に販路拡大し、販売を進めている。けんぶち絵本の里大賞の副賞には剣淵産の安心安全な農産物等 3 年分（びばからす賞は 2 年、アルパカ賞は 1 年）が贈られる。また、町内の若手農家らにより、自分たちの育てた農産物を軽トラックに積んで道の駅けんぶ

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さん及び絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

[2] 2023 年 9 月 30 日、絵本の館職員 D さんへの聞き取りより

ちで市場を開く軽トラマルシェ「VIVA-マルシェ」も始まった。この軽トラマルシェには、絵本の館の絵本キャラバンカーも参加している（剣淵町教育委員会, 2024）。

また、剣淵町には、絵本作家のデザインにより絵が描かれた、小学校や保育所、ごみ収集車などの施設が多く存在し、絵本の里らしい景観が生み出されている。剣淵町のご当地郵便ポストは、絵本作家らによりデザインされており、剣渕郵便局前には宮西達也氏、道の駅絵本の里けんぶちには佐藤正人氏、剣淵町役場前にはあべ弘士氏、絵本の館前には真珠まりこ氏によるご当地ポストが設置されている[1]。

3-3-2　絵本を通じた地域間交流

絵本の里づくりの広がりとともに、他地域との地域間交流も生まれた。

2000 年 3 月、絵本でまちづくりサミットが、けんぶち絵本の里を創ろう会の呼びかけにより剣淵町にて開催された。この絵本サミットは、絵本を素材としたまちづくりを進めているまち同士で成果と課題を話し合い、今後の活動の指針を模索することをねらいに行われた。絵本を活用したまちづくりを行う「大島町絵本館」（富山県旧大島町）、絵本のテーマパーク「木城えほんの郷」（宮崎県木城町）、そして剣淵町絵本の館、けんぶち絵本の里を創ろう会が参加し、互いのまちづくりについての実情や展望を語りあった（剣淵町史編さん委員会, 2020）。

富山県大島町（現富山県射水市）は、剣淵町と同じように、「絵本」を活用したまちづくりを行ってきた。1988 年に、町民から寄せられた 100 余りの意見の中で町民の関心の高かった「絵本」が大島町の文化高揚の核としてとりあげられると、1991 年の第 3 次大島町総合計画に盛り込まれた。その基本目標として「住みよい、明るい、豊かなまちづくり」が提唱されると、1991 年度を初年度とした絵本館創設事業が開始され、1994 年 8 月に大島町絵本館が開館した[2]。

2005 年 11 月、市町村合併により大島町は射水市となり、大島町絵本の館は射水市大島絵本館となるが、剣淵町は、大島町とともに射水市となった旧大門町と、1995 年に友好都市提携を結んでいたことから、2006 年 5 月 11 日に姉妹都市として改めて射水市と盟約調印を交わし、産業、経済、文化など様々な分野において交流を図っている（剣淵町教育委員会, 2024）。

なお、大島絵本館でも、絵本の原画展や絵本普及活動が行われており、剣淵町絵本の館とともに、全国の絵本ミュージアムの先駆け施設となってきた。

[1] 剣淵町絵本の館公式インスタグラムより
[2] 射水市大島絵本館ホームページより

4　地域文化を活用したまちづくり

4-1　絵本文化の確立とまちづくりへの活用

「絵本」をまちづくりに用いたきっかけは、士別市在住の銅版画家である小池暢子氏から紹介された、元福武書店児童図書編集長の松居友氏が剣淵町を訪れたときの、以下の発言からであった。

> この町はヨーロッパの風景に似ていますね。ヨーロッパでは、絵本の原画は芸術品として高く評価され、あちこちのまちに絵本原画の美術館があります。しかし、日本では個人の美術館がわずかにあるだけです。絵画と違って、絵本の原画はページ数分がそろって一つの作品です。いろいろな作家の作品を集めて、だれもが見たいときに見ることができる原画美術館が日本にも欲しいと思っているのです。（剣淵町史編さん委員会（1999:301）より）

当時まちづくりの方策を模索していた商工会青年部長が、この話を聞いて「その美術館を建てたらすすきので有名になれるか」と聞き返したところ[1]、松居友氏から「有名になれるかもしれない」と返答があり、これを「すすきので有名になれる」と早とちりをして絵本をテーマとしたまちづくりをはじめたという（けんぶち絵本の里を創ろう会,2018）。このようにして、絵本原画美術館構想が生まれ、現在まで続く絵本の里づくりの原点となった。

絵本の館に配架されている絵本や図書は、剣淵町が購入しているもののほかに、町内外・国内外からの支援者による寄贈によるものがある。絵本の館司書 B さんは、「絵本の館では結構町民の方だけじゃなくて遠方の方から自分の持ってる絵本を寄贈したいと連絡頂くことも結構あります[2]」と話す。けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんも、絵本の寄贈について、「絵本の里大賞の結果が出ると、その秋に何人かで出版社に行く。あなたのとこの作家の絵本が選ばれましたよって。そしたら、これ来年出そうと思ってる本なんだけど持ってってくれる？って言われることもある。あとは新刊が出るたびに作家さんがサイン入れて寄贈してくれたり[3]」と話した。剣淵町絵本の館には、購入や寄贈により多くの絵本のが集まるが、絵本の館は絵本の保存の役割も担っており、絵本の除籍は行わず、特に初版は大切に保管している[4]。また、けんぶち絵本の里大賞には毎年 300 タイトルほどの応募があり、絵本の館に毎年新刊が集まるため、応募があるたびに絵本の所蔵が増える仕組みができて

[1] 以前すすきので「剣淵」と「剣菱」を間違えられた悔しさがあったという
[2] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[4] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

いるという[1]。

剣淵町絵本の館は、絵本原画収蔵室を有しており、2024 年現在、1,128 点の絵本原画を保管している（剣淵町教育委員会,2024）。収蔵している絵本原画は、寄託を受けているものが過半数であるが、寄託料は無料としている。寄託を受けている寄託品以外には、剣淵町が購入したもののほか、国内外から寄贈を受けたものを保管している。絵本の館司書 B さんは、剣淵町絵本の館に絵本や絵本原画の寄託・寄贈が集まる理由として、「絵本原画を保管するための施設が整っている絵本の館への信頼」「30 年以上にわたる絵本作家や出版社との交流」があるのではないかと話した[2]。

剣淵町では、人々の心を豊かにする「絵本」という文化を活用しながら、様々な事業を実施している。第 6 期剣淵町総合計画（計画期間 : 2021 年度～2030 年度）では、テーマを「人・夢・大地 次代につなぐ 絵本の里けんぶち」としている[3]。

「絵本」は、読む人を選ばず、誰もが生涯で一度はふれあうという特性を持っており、地域資源として、誰からでも受け入れられやすい素材であるといえる。剣淵町は、この「絵本」という地域資源を、町を売り出すためのテーマや観光資源として利用する一方で、町内の子どもたちへ向けての読み聞かせやブックスタート事業をはじめとする子育て支援や、障害者支援施設剣淵西原学園との協力など、地域住民への教育・福祉施策に活用してきた。

4-2　絵本作家とのつながり

4-2-1　絵本作家との継続した関係性

剣淵町の絵本の里づくりが浸透していくにつれて、「絵本の里けんぶち」と絵本作家や出版社・絵本関係団体との間につながりが生まれた。剣淵町と絵本作家や出版社とのつながりについて、絵本の館司書 B さんは次のように語っている。

> 作家さん、出版社との繋がりは紹介したいのが、長谷川義史さん、何度も絵本の里大賞を取られてるんですけど、このおいもが題材の絵本、実は絵本に出てくるおいも、剣淵のおいもなんです、けんぶちじゃがいもって絵の中に書いてあって、最後のページに（けんぶち絵本の里を創ろう会会長）A さんも登場しています[4]。作家さんとの 30 年のつながり、出版社とのつながりがこういう絵本の中にも登場するような財産になっています。作家さんも講演会とかでお招きする以外にプライベートで来てくださる方もたくさんいらっしゃいますし。お忍びでいらっしゃったりとかして、絵本

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さん及び絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[3] 剣淵町総務課発行「第 6 期剣淵町総合計画」より
[4] 長谷川義史（2010）『じゃがいもポテトくん』小学館

の館にいてびっくりしたりとか。出版社、作家の皆さんとのつながりっていうものもほんとに財産ですよね。[1]

中には、何度も繰り返し剣淵町を訪れる絵本作家もいるというが、剣淵町は、こうした絵本作家とのつながりを大切にしている。2018 年のけんぶち絵本の里を創ろう会設立 30 周年の際には、約 50 名の絵本作家らからコメントやお祝いメッセージが集まり、けんぶち絵本の里を創ろう会（2018）発行の『けんぶち絵本の里を創ろう会 30 周年記念誌』にまとめられている。ある絵本作家は、『けんぶち絵本の里を創ろう会 30 周年記念誌』の中で、「会長をはじめ、けんぶち絵本の里を創ろう会の方々にはいつもお世話になり、剣淵町を訪れるのが楽しみになっていました」と語っている[2]。

このような剣淵町と絵本作家とのつながりの裏には、けんぶち絵本の里を創ろう会会員と絵本作家との親密な関係性がある。けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、「作家さんと、向こうはどう思ってるか知らないけど、こっちは友達感覚で接していけるのが民間の力なの。ほんとにもう、お友だち感覚というか、だって携帯に入ってるし番号が[3]」と語る。絵本の館司書 B さんも、けんぶち絵本の里を創ろう会会員と絵本作家との関係性について、「（けんぶち絵本の里を創ろう会の）会員と作家の皆さんはプライベートでのつながりもあるんです。（町民と絵本作家が参加する宴会の雰囲気について）有名な絵本作家の人と肩組みながらお酒飲んで、バシバシ肩叩いたりしていて、びっくりします[4]」と語った。絵本作家らとの柔軟で密接な関係性を築くことは、役場を通したやり取りだけでは困難であり、ここに民間の活動団体ゆえの強みが活きているといえよう。

また、剣淵町では、絵本作家や出版社との継続した関係性を大切にしている。けんぶち絵本の里大賞受賞作家や、講演会のために剣淵町を訪れた人に向けて剣淵町産の農産物を贈っており、毎年冬にけんぶち絵本まつりの開催けんぶち絵本の里大賞授賞式では、受賞作家を招いて町をあげてのおもてなしを行っている。新型コロナウイルス感染症の流行前は、けんぶち絵本の里大賞授賞式に合わせて 100 人規模の歓迎レセプションを行っていたほか、授賞式の翌日に、小学校で受賞作家による特別授業が開かれており、町民と絵本作家らの交流の機会となっていたという[5]。

けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんによると、けんぶち絵本の里大賞について、「専門家ではなく一般人が審査するけんぶちの賞は権威も何もない」と言われたことがあったが、一方で、絵本作家・宮西達也氏は、「私は消費者が選ぶ選び方が好きだから、けんぶちの賞に応募する。最初は自分の作品は評価されなかったが、けんぶちで初めて賞をとること

[1] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] けんぶち絵本の里を創ろう会（2018）より
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[4] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[5] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより

ができた」と語ったという[1]。剣淵町の中心事業であるけんぶち絵本の里大賞が、絵本作家らから支持されており、毎年約 300 点の絵本作品の応募が集まるようになった。

絵本作家や出版社との継続した関係を守ってきたことで、けんぶち絵本の里大賞には、毎年多くの作品が集まっており、絵本作家や絵本の関係者を剣淵町に招いて講演会やおはなし会を開催したり、絵本の館で絵本原画展などの展示会を開催したりすることができている。また、絵本作家や出版社から絵本の寄贈を受けたり、2013 年には講談社より「講談社本と遊ぼう全国訪問おはなし隊」旧キャラバンカー（移動図書館車）の寄贈を受けたりするなど、絵本作家や出版社による多くの支援が得られるようになった。

4-2-2　絵本作家・堀川真さんとのつながり

剣淵町と絵本作家のつながりの例として、絵本作家・堀川真さんとのつながりについて紹介する。堀川さんは、北海道紋別市出身、名寄市在住の絵本作家であり、名寄市立大学に勤務しながら、毎月第 3 土曜日に、絵本の館にて工作ワークショップ「真ちゃんの創作教室」を開催している。手掛けた絵本は、過去に 4 作品がけんぶち絵本の里大賞に入賞しており、『北海道わくわく地図えほん』にて第 16 回けんぶち絵本の里大賞びばからす賞（2006 年）、『いのちのいれもの』にて第 21 回けんぶち絵本の里大賞びばからす賞（2011 年）、『もりのやきゅうちーむ　ふぁいたーず』にて第 26 回けんぶち絵本の里大賞びばからす賞（2016 年）、『私の名前は宗谷本線』にて第 31 回けんぶち絵本の里大賞びばからす賞（2021 年）を受賞している[2]。

堀川さんは、絵本の館にも絵本を卸していた旭川市の児童書専門店「こども冨貴堂」を通じて、絵本の里づくり事業が始まった当初から剣淵町にかかわるようになった。堀川さんは、当時のことを、「剣淵で絵本やるから手伝ってくれって言うから、なんだそれはと思いながら行ったら、ちょうど旧庁舎の改修工事してた」と語っている[3]。当初は、絵画教室というかたちで、知的障害者の更生施設「剣淵西原学園」の人々に向けたワークショップを開催していたが、その後現在の「真ちゃんの創作教室」となり、子どもたちに人気のイベントとなっている。

2024 年 9 月 21 日土曜日に開催された「真ちゃんの創作教室」には、合計で大人 7 人・子ども 6 人の 3 家族が参加していた。2024 年 9 月 21 日の「真ちゃんの創作教室」では、参加した子どもたちが、堀川さんの指導を受けながら、それぞれが紙飛行機や動く手作りおもちゃなどを作り、遊んでいた。ある男の子が、完成した紙飛行機を持ちながら、絵本の館に職員に嬉しそうに自慢しているような様子も見られた。

「真ちゃんの創作教室」では、毎回つくる作品があらかじめ決まっているわけではなく、

---

[1] 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんへの聞き取りより
[2] 剣淵町絵本の館ホームページより
[3] 2024 年 9 月 21 日、堀川真さんへの聞き取りより

参加者の年齢や興味に合わせて自由に工作をしていく。堀川さんは、西原学園でのワークショップ時代から、単に良い作品を創るための指導をするのではなく、参加者に楽しんでもらうことを大切にしており、創作教室を開催するうえで大事にしている想いとして、「楽しかったと思って帰ってほしい。“作品”よりも“記憶”をつくりたい」と語った。また、「(絵本の館が）地元の子どもたちにとって大切な場所であってほしい」とも語っている[1]。堀川さんの活動は、創作教室を通して、絵本の館利用する剣淵町の子どもたちの居場所づくりに貢献している。

剣淵町と堀川さんとのつながりが生まれたことで、絵本作家の指導によるイベントの開催が実現し、剣淵町絵本の館に人気のプログラムが生まれた。また、堀川さんは、北海道を題材とした絵本作品も多く手掛けており、「地元の人に大事にされたい」「僕たちの普通や常識・郷土色を大切にしたい」と、自身の創作活動にかける想いを話した[2]。

以上のように、絵本作家らとのつながりは、けんぶち絵本の里大賞や絵本原画展、創作教室など絵本文化を活用した事業への絵本作家らの参加協力を可能にし、絵本の里づくりにおける重要な役割を担っている。

[1] 2024 年 9 月 21 日、堀川真さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 9 月 21 日、堀川真さんへの聞き取りより

5　地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題

5-1　地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性

5-1-1　地域ブランドの確立と文化資源の活用

5 章では、これまでの議論をふまえて、剣淵町の絵本の里づくり事業が地域社会にもたらしてきた影響と、その継続的な活動を支えた要因について改めて考察することで、地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題について議論していきたい。

剣淵町の絵本の里づくりでは、「絵本でまちづくり」という新しく、珍しい取り組みが話題を呼び、剣淵町に「絵本」という地域ブランドが確立・定着した。そして、長年にわたって開催されてきたけんぶち絵本の里大賞の実績や、絵本原画収蔵館や絵本の館といった専門性の高い設備が評価されたことで、毎年けんぶち絵本の里大賞への多数の応募や、日本のみならず世界中から絵本や絵本原画が集まるようになった。剣淵町では、その新規性と一流性が評価され、「絵本の里けんぶち」のブランディングの成功につながったのではないかと考えられる。

また、大衆化され、多くの人から親しみを得られやすい「絵本」というテーマをまちづくりの素材として選んだことで、町内の子どもたちへ向けての読み聞かせやブックスタートをはじめとする子育て支援など、地域住民への教育・福祉施策などに活かすことができた。

けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、「絵本作家さんとか剣淵に来る人が、「剣淵にまた来ます」って言ったときに「なんで来るの？」って聞くと、「剣淵の人に会いに来たい」と言った。絵本の里づくりをやったというよりも、人づくりをやったというのが、（活動が）長く続いた理由だと思う[1]」と語る。これは、経済偏重に流れる社会の中で、「けんぶちをこころ豊かな絵本のふるさとにしよう！」と、文化を大切に守り育ててきた剣淵町の成果であるといえよう。

5-1-2　地域文化を活用したまちづくり事業の多面的役割

剣淵町で進められてきた絵本の里づくり活動は、町内外での人々のつながりを創出したほか、教育や福祉、農業など、多分野において影響を与えた。

剣淵町の絵本の里づくりは、町外への町の PR を目的として始まり、「絵本の里けんぶち」や「剣淵町絵本の館」の知名度の向上にともなって、遠方からの来訪者が増加した一方、地域住民や町の子どもたちにとっても、絵本の館やけんぶち絵本の里を創ろう会が憩いの場や交流の場となっていた。また、剣淵町は、地域住民に向けて、絵本文化を活用した子育て

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより

支援事業や子どもの居場所づくり事業を行ってきた。絵本の館司書 B さんは、剣淵町絵本の館を、「観光施設としての側面と、地域の公民館的側面をあわせ持った施設であるといえる[1]」と評価している。絵本の館は、観光施設としての機能の他に、地域の図書館や公民館としての機能を備えている。

絵本の館やけんぶち絵本の里を創ろう会は、地域住民が「絵本」や「まちづくり」を仲立ちとして集い、語り合い、交流する場となり、地域住民による「絵本」や「まちづくり」を中心としたコミュニティの形成につながったといえる。

そして、絵本の里づくり活動は、知的障害者の更正施設「剣淵西原学園」や無農薬・低農薬（有機栽培）の生産者団体「剣淵・生命を育てる大地の会」など、教育・福祉・農業など他分野への広がりも見せたている。「写真の町」北海道東川町の事例において、写真の町としての取り組みが教育にも発展したことは、自分たちの住む地域を再認識し、愛郷心を育むことにつながっていると評価されている（中山, 2024）。

地域文化を活用したまちづくり事業は、移住者や観光客の増加だけでなく、地域文化が住民の共通の心のよりどころとなるとともに、教育や福祉、農業などの分野においても地域社会の活性化に資することが期待される。

5-2　地域文化の創出によるまちづくり事業の課題

5-2-1　メディアを通した情報発信の重要性

本稿では、3-2 で、剣淵町の絵本の里づくりの広がりは、テレビや新聞などメディアを通した知名度の向上や、町外の人々から多くの支持を受けたことによる影響が大きかったことを述べた。「絵本」を活用した住民活動によるユニークなまちづくり事業がテレビや新聞などに取り上げられ、町外の人々から認知されはじめたことで、剣淵町を訪れる人が増えた。同時に、教育・福祉・農業の連携による絵本の里づくり、活動の拠点となる絵本の館の機能、来館者が投票するけんぶち絵本の里大賞など、地域の特色を生かした文化芸術活動による地域活性化の取り組みの成果が高く評価され、国や道などから地域づくり賞など、多数の表彰を受けた。

当初は、町内の人からはあまり関心が向けられず、「剣淵は農業の町なのに、絵本で飯が食えるのか」と活動に否定的な声もあったというが、町外の人々や、町を離れた元町民から絵本の館が支持されはじめ、徐々に町民からも認知されるようになっていったという[2]。剣淵町の「絵本」を活用した住民活動によるまちづくり事業が、テレビや新聞などのメディアに取り上げられ、国や道などから数多くの表彰を受けてきたたことで、町外からの認知度の向上だけでなく、町民からの「絵本の里けんぶち」の価値の再認識にもつながった。

---

[1] 2023 年 6 月 10 日、絵本の館司書 B さんへの聞き取りより
[2] 2024 年 8 月 22 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会員 G さんへの聞き取りより

新しい地域文化が浸透し、地域文化として定着するまでの過程においては、メディアや地域外の人々の存在が重要な役割を果たすのではないかと考えられる。新しい地域文化を、情報発信力のあるメディアを通してうまく外へ PR できるかどうかが、まちづくりの成功の鍵となるのではないだろうか。

5-2-2　運営体制・支援者の存在と事業の継続性

住民活動から始まった剣淵町のまちづくり事業は、行政との協働や、絵本作家ら活動の支援者の存在によって、活動の継続性を確保してきたといえる。

2-2 で、剣淵町における民間の活動団体と行政との連携によるまちづくりの運営について紹介したが、剣淵町では、行政が主にハード事業面で絵本の里づくりにかかわってきたことで、活動に使用できる予算が増え、また、より専門性の高い絵本事業を実施することができた。剣淵町の絵本の里づくり活動は、民間と行政との協働で事業が進められてきたことで、無理のない息の長い活動が可能となったのである。けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、「行政にかかわってもらわなかったら、ここまで長生きはできなかっただろうね」と語っている[1]。

「写真の町」北海道東川町の事例では、当初から行政主導で事業が進められてきた点が剣淵町における状況と異なるが、「東川町国際写真フェスティバル[2]のような大規模イベントの継続的な開催には、町全体での取り組みが必要である」との考えから、温泉街の観光振興策が、町長主導の形で町全体での活動に昇華されてきた背景があった（中山, 2024）。また、東川町においても、住民や民間団体と行政による連携・コラボレーション、ネットワーク化が積極的に行われている（守屋, 2011）。

また、絵本作家のように、外部から活動を支援する人々の存在もまた、絵本の里づくり活動の継続を助けてきた。4-2 で述べたように、けんぶち絵本の里を創ろう会は、絵本作家や出版社・関係団体との親密な関係性を築いてきた。剣淵町・けんぶち絵本の里を創ろう会と絵本作家らとのつながりは、剣淵町の財産となり、けんぶち絵本の里大賞や絵本原画展、創作教室など各種イベントの開催を可能にしているほか、絵本作家をはじめとする活動の支援者からは、多くの絵本の寄贈も受けている。けんぶち絵本の里を創ろう会初代会長は、北海道新聞に掲載されたインタビューで、絵本によるまちづくりが始まった当時の様子について次のように語っている。

> スタートはしたものの、絵本に関しては全員が素人でした。（中略）ほかの市町村と比べても、絵本という点で剣淵はゼロからの出発でした。特に資金面では苦労しまし

[1] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより
[2] 写真の町東川賞の授賞式とともに、国内外のゲストを招いての作品展示・ワークショップ・フォーラムや、アマチュアカメランによる写真展などが開催されている

た。初めのうちは有志に「会が一人前になったときに返します」という借用書をかいたりして資金集めをしたりしました。そのうちに町外から多くの人が協力してくれるようになったのです。今にして思えば、われわれが素人集団だったがゆえに手を差し伸べやすかったのではないかと思っています。また、われわれも協力者たちのアドバイスを素直に聞くことができました。[1]

地域文化の担い手は地域住民である。文化資源の活用には民間の力を必要とするが、その継続的な活動には、民間・行政の協働による町全体での活動と、その他外部の支援者の存在が重要となるであろう。

5-2-3　若者世代の参加と将来性

2-1-2 や 3-1-1 で述べたように、剣淵町の絵本の里づくりの活動が 30 年以上にわたって継続している裏で、けんぶち絵本の里を創ろう会の会員の高齢化や、絵本の館の年間の来館者数が以前より減少している現状がある。けんぶち絵本の里を創ろう会会員らからは、「おじさんたちが絵本のイベントに集まるのは全国みても剣淵ぐらいで、里づくりの歴史の長さが剣淵のよさ」と話しながらも、「長い歴史を大事にしながら、新しいことをやらないといけない、そのためには若い人たちの力が必要」といった声があった[2]。けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんも、けんぶち絵本の里を創ろう会の今後の活動について、次のように語った。

活動的にはまあ、勢い的にはだいぶ弱まってきている。30 年も経つとなんでも色あせてくるというか劣化してくる。色んな意味でもう目標は達成した部分もあるのね。私は最初からやってる人だけど、次の世代の人が何をやりたいかって、どうしたいかって、そういう話が出てきた中で次に行かないと、我々が主導的にやったって、目に見えてる話だから。昔みたいな勢いもないし、力もないわけだから。やっぱこれからは若い人たちの思いが主導となってそれが創ろう会を引っ張っていって欲しいなって思ってる。絵本の里づくりって言うのは今後も町の看板として剣淵町は掲げ続けることになると思うんで、それに新しい息も吹きかけながら、息の長い活動を。必ず、（活動の）火は消さないこと。その中で、こんなことやりたいとか、想いだけは消えないようにしたいね。[3]

---

[1] 北海道新聞（1991.08.03 夕刊）より
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館職員 E さん及びけんぶち絵本の里を創ろう会会員 H さんへの聞き取りより
[3] 2023 年 6 月 10 日、けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんへの聞き取りより

けんぶち絵本の里を創ろう会会長 A さんは、若い世代への活動の継承や、今後の新しい取り組みに期待しながら、まちづくりへの想いを大切に息の長い活動をしていきたいと語っている。

事業の継続性の確保には、利用者によるリピート利用や、若い世代の参加が必要である（青柳, 2010）。絵本の里づくりにおいては、絵本の館の来館者の減少や、けんぶち絵本の里を創ろう会の高齢化が課題となっており、町への来訪者の増加と、若い世代の活動への参加をうながしていく努力が求められる。そのためには、誘客力のある新事業や催し事を通して活動の新鮮さを失わせないことで、来訪者のリピーターを確保し、教育現場などとの協力関係を発展させて若い世代の活動への参画をうながすといった方法で、活動の後継者を育成していくことなどが重要となるであろう。

剣淵町では、けんぶち絵本の里を創ろう会による新しい企画として、町が所有する移動図書館車で北海道内を巡る「エホンキャラバン 179」事業が 2021 年度より始まっている。「エホンキャラバン 179」は、絵本を積んだ移動図書館車で全道各地へ出向き、読み聞かせなどを行う取り組みである[1]。このキャラバン事業には、20 代の会員も活動に携わっており、会員ではない町の若者が同行することもあるといい[2]、若い世代を巻き込んだ新しい取り組みであるため、今後の事業の発展が期待される。

[1] 北海道新聞（2022.05.21 朝刊）より
[2] 2024 年 8 月 22 日、絵本の館職員 F さんへの聞き取りより

6　結論

本研究では、地域文化の創出によるまちづくり事業の可能性を探ることを目的とし、北海道剣淵町の絵本の里づくり事業を事例に、既存の地域資源にとらわれない新しいまちづくり事業が地域社会に与える影響と、継続的な活動を行うために必要な要素を明らかにすることで、その有用性と課題について議論してきた。

2 章では、絵本の里づくり事業の活動主体と主な事業内容について整理した。住民団体であるけんぶち絵本の里を創ろう会の活動によって 1988 年に始まった絵本の里づくりは、絵本を活用したまちづくりで「剣淵」の名を有名にし、交流人口を増やすことを目標として行われ、30 年以上経った現在でもその活動は継続している。絵本の里づくり事業では、けんぶち絵本の里を創ろう会を中心とする住民団体主導の活動に、行政が、活動の拠点となる絵本の館の整備や絵本・絵本原画の購入など、主にハード事業の面でかかわるようになり、民間と行政による連携体制が取られてきた。主な事業内容として、来館者の投票により絵本の大賞が選ぶ「けんぶち絵本の里大賞」や、けんぶち絵本の里大賞の授賞式や受賞作家による絵本原画展などとともに開催される「けんぶち絵本まつり」があるが、絵本の館を通じた教育・福祉施策にも力を入れており、読み聞かせや創作教室などのイベントを開催するなど、子育て支援事業・子どもの居場所づくり事業に取り組んでいる。

続く 3 章では、「絵本の里づくりの広がり」をテーマに、絵本の館の利用状況を分析し、メディアの存在による住民意識の変化や、絵本の里づくりの地域社会への広がりについて論じた。絵本の館の開館以降、徐々に来館者数が増加し、町外からの来訪者も多くなったことで、交流人口の増大が実現したが、新型コロナウイルス感染症の流行の影響もあり、近年は来館者数が減少傾向にある。「絵本の里けんぶち」が町に定着する過程において、当初は文化資源によるまちづくりに対して、町民からの否定的な意見があったが、メディアの存在や、町外の人々からの支持を受けて、住民意識の変化が見られたことがわかった。また、絵本の里づくり活動は、剣淵町の交流人口の拡大に加えて、知的障害者の更正施設「剣淵西原学園」との協力や、無農薬・低農薬（有機栽培）の生産者団体「剣淵・生命を育てる大地の会」の活動への発展など、教育・福祉・農業など他分野への広がりも見せてきた。

4 章では、絵本文化を活用したまちづくりの特徴について考察した。剣淵町では、大衆化され、多くの人から親しみを得られやすい「絵本」というテーマをまちづくりの素材として選定したことで、町内の子どもたちへ向けての読み聞かせやブックスタートをはじめとする子育て支援など、地域住民への教育・福祉施策などに活かすことができた。また、絵本の里づくりの活動を通じて、剣淵町と絵本作家や出版社・関係団体との交流が生まれたことも述べた。けんぶち絵本の里大賞や絵本原画展、創作教室などといった、剣淵町で行われている各種絵本事業は、絵本作家・堀川真さんをはじめ、絵本作家らによる支援と協力により支えられてきた。

そして5章では、これまでの議論をもとに、地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題について改めて考察した。既存の地域資源にとらわれない新しいまちづくり事業は、他地域にはないその新規性や独自性が話題を呼び、新たな地域ブランドの確立につながっている。また、地域文化を活用したまちづくり事業は、移住者や観光客の増加だけでなく、地域文化が住民の共通の心のよりどころとなるとともに、教育や福祉、農業などの分野においても地域社会の活性化に資することが期待される。ただし、新しい地域文化が浸透し、地域文化として定着するまでの過程においては、情報発信力のあるメディアや、地域外の人々といった存在が重要となる。また、継続的なまちづくり活動には、民間・行政の協働による町全体での活動と、その他外部の支援者の存在も求められる。それらに加えて、事業の継続のためには、安定した文化資源利用者の確保や、若い世代の活動への参加も課題となっている。

本研究では、北海道剣淵町の絵本の里づくり事業を事例に、地域文化の創出によるまちづくり事業の有用性と課題について考察してきたが、剣淵町が持つ潜在的な地域特性をふまえた考察や、他地域における事例との比較などにおいて、議論の余地がある。また、今回は剣淵町のまちづくりにかかわる当事者への調査が多くなってしまったが、剣淵町の外部の人々からの視点をふまえた調査も必要であると考える。

参考文献

【参考文献】

青柳かつら（2010）「地域博物館における他者との連携による地域学習活動の現状と課題 ―北海道士別市朝日町郷土資料室の事例―」、北海道開拓記念館研究紀要、38:55-66

大串夏身（2021）『まちづくりと図書館 ―人々が集い、活動し創造する図書館へ』青弓社

けんぶち絵本の里を創ろう会（2018）『けんぶち絵本の里を創ろう会 30 周年記念誌』

剣淵町教育委員会（2024）『「絵本の里けんぶち」の取り組みについて』

剣淵町史編さん委員会（1999）『百年のあゆみ 剣淵町史 続史一』

剣淵町史編さん委員会（2020）『剣淵町史 続史二』

剣淵町総務課（2021）「第 6 期剣淵町総合計画」

白井彦衛（1989）「農山漁村の魅力ある開発手法を探る ―地域文化資源を対象として―」『農村計画学会誌』8(3):2-8

戸所隆（2004）「芸術・文化を活かしたまちづくり」『関東都市学会年報』6:38-38

中山正則（2024）「「写真文化首都 北海道東川町」が写真の町として発展する経緯と学校教育における写真による地域文化づくり」『社会科教育学特講』調査報告 22:91-106

福山貴史・敷田麻美（2019）「地域づくりにおける「負の資源」の活用プロセス ―北海道紋別市の流氷の価値創造の事例―」『日本地域政策研究』23:64-73

守屋貴司（2011）「北海道東川町の地域活性化のための地域マネジメントに関する研究」『立命館経営学』49(5):169-187

【参考 web サイト】

射水市大島絵本館ホームページ ＞ 沿革・あゆみ http://www.ehonkan.or.jp/gaiyo/enkaku.html （2024 年 12 月 12 日閲覧）

絵本の里けんぶち町ホームページ https://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/ （2024 年 12 月 12 日閲覧）

絵本の里けんぶち町ホームページ ＞ けんぶち町の紹介 ＞ 絵本の里づくり https://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/about-kembuchi/%e7%b5%b5%e6%9c%ac%e3%81%ae%e9%87%8c%e3%81%a5%e3%81%8f%e3%82%8a/ （2024 年 12 月 12 日閲覧）

剣淵町絵本の館ホームページ ＞ 絵本の館のご案内 ＞ けんぶち絵本の里を創ろう会・絵本の館のあゆみ https://ehon-yakata.com/whats/history/ （2024 年 12 月 12 日閲覧）

剣淵町絵本の館ホームページ ＞ けんぶち絵本の里大賞 概要 ＞ 過去の受賞作品 https://ehon-yakata.com/prize/backnumber/ （2024 年 12 月 12 日閲覧）

剣淵町観光協会ホームページ ＞ 特産品 http://www.kembuchi-kankou.com/specialty/ （2024 年

12 月 12 日閲覧）

【新聞記事】

北海道新聞（1991.08.03 夕刊）「絵本の里づくり ―上川管内剣淵町にオープンした「絵本の館」を活動拠点にする高橋毅さん」

北海道新聞（2021.09.22 朝刊）「図書館、子育て、まちづくり 剣淵の拠点 ＊絵本の館 笑顔届け 30 周年 ＊全道キャラバンでまち PR」

北海道新聞（2022.05.21 朝刊）「移動絵本図書館 引く手あまた ＊剣淵町民団体の活動 2 年目 ＊10 市町村から招致 観光 PR も一役」

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご協力いただきました。けんぶち絵本の里を創ろう会の皆さま、剣淵町絵本の館の皆さま、そして堀川真さんには、本研究の調査対象者としてご協力いただきました。聞き取り調査を通して、大変貴重なデータを多く得ることができました。厚く御礼申し上げます。指導教員の宮内泰介先生をはじめ、地域科学研究室の先生方には、終始熱心なご指導・ご助言を頂きました。本当にありがとうございました。

改めて、本論文の作成にご協力いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。